

影山太郎著

点と線の言語学

—言語類型から見えた日本語の本質—

設問（理解を深めるために）の解答例

くろしお出版

2021年

© KAGEYAMA Taro

第1章：言語の中の<点>と<線>とは

[1] a, b, c のいずれも、主語（動作主）が一種の場所として標示されているから、ガ格を使った場合と比べると動作主が目立たなくなり、結果として、控え目で丁寧な印象を与えるという効果がある。しかし、動作主が目立たなくなっても、動詞の形はあくまで他動詞の能動形のままであるから、完全に<なる>型の表現になったわけではない。<する>対<なる>の区別からすると、両者の中間的な表現と見なすことができる。

[2] 表 1.1 の E.「出来事の展開」に該当する。日本語の揭示では「利用する」という動詞を用いてトイレを使うときの手順を<線的>に伝えるが、英語の揭示は“keep…clean”という表現でトイレの綺麗な状態(使用後の結果状態)という<一点>を強調している。

[3] 表 1.1 では D「使役・受身」に当てはめられる。英語(およびドイツ語)で受身文を用いるのは、もとの他動詞文における動作主を強く意識しているからで、これは「動作を行う側」を重視した表現になる。他方、日本語訳の「変えられる」は受身形よりむしろ可能形として理解されるのではないだろう。それは、受身文と言っても、能動文の動作主が背景に存在するからである。英語と比べると日本語の受身文は独自の性質(第4章)を持っているので、「わたしたちは一瞬にして変わる」のように自動詞を用いたほうが端的で分かりやすい。

第2章：言語文化と語用論の<点>と<線>

[1] 英語で台風にも人間のような名前を付けるのは<個>を重視するためで、日本語で発生順に番号をつけるのは複数の台風の<線的>なつながりを重視するためであると考えられる。

[2] 日本語の「突き刺さる」という表現は、本文の例(4a, b)の「これから学校まで四丁」と同じ発想で、外から耳の中に入って行く方向を描いている。英語の stick out of your ears は、例(4c)の「学校から振り返って四丁」と同じ発想で、目標点の耳から外へ出てくるという逆向きの表現になっている。

[3] 疑問文に対する応答のし方(本文の例 14, 15)と同じ理屈で、英語は相手の発言の中身という<一点>に同意するときだけ、“Yes”と言う。日本語は発言の中身より相手への配慮つまり、社会的な<線>—を重視し、相手の話を聞いていますという意味合いで「はい」と言う。英語の会話で日本人が、相手の発言内容に同意していないのに安易に“Yes”と言うのは誤解を招くことになりやすい。

第3章：アスペクト意味論の<点>と<線>

[1] 英語の進行形は「もうすぐ最終的な境界点に至る」ということを表すので、The training is arriving.は「電車が近づいてきて、もうすぐ到着する」という意味になる。日本語の「着く」は瞬間動詞で、境界点に届くことを意味するから、完了を表す「て」と一緒になって「着いて」となると、意識としては既に境界点への到着が完了したことになり、その後に「いる」がつくことで、電車が駅に到着して停車しているという結果状態を表す。

[2] through は何らかの状況(障害)を通り抜けることを意味するが、英語では結果重視のパーフェクティブな視点によって、通り抜けたあとの最終点がクローズアップされる。最終点というのは期待した目標なので、そこに至ったということは、喜ばしいという肯定的な評価になる。ところが、インパーフェクティブな発想を基調とする日本語では最終点への到着より中間経路を着実に進んで行くことに重点が置かれる。「スルー」という和製英語は、英語本来の着点重視の視点を日

本語に持ち込み、最終点ばかりを強調することになる。本来は丁寧に扱うべき中間の手続きをすっ飛ばして、いきなり最終点だけをクローズアップするので、「無視する」や「適切な注意を払わない」といった否定的な意味合いになる。

[3] パラシュートで降下するのは、「空中」という中間経路を下へ降りていくことが前提となるから、parachute という動詞自体が「空中を(上から下へ)」という中間経路の意味を含んでいる。中間経路の移動(降下)と、飛行場への到着を結び付けるのが to という「推移」の前置詞であるが、parachute では中間経路の移動(落下)が動詞自体の意味に含まれるため、例文(ii)b では onto の to を省略して on という 1 点にフォーカスすることができる。ところが、rumble はそれ自体では移動の意味がない。移動の意味がないということは、言い換えると中間経路を持っていないということである。動詞自体が中間経路を持たないときは、中間経路上の移動から到着への推移を表す前置詞 to が絶対に必要であるから、例文(i)b では into を in に省略することはできない。

第4章：構文論における<点>と<線>

[1] burp (ゲップをする) は生きている人間の活動を表すから、walk や run と同じように非能格動詞 (意志動詞) であり、普通なら使役化できない。ところが、I will walk you home. のように他人と一緒に行動するという「随伴」の意味が生じる状況では、他動詞用法が例外的に可能になる。一人では起き上がれない赤ん坊が寝たままゲップをすると、吐き出したものが肺に入ってしまう危険性がある。そのため、母親は赤ん坊を抱き上げ、背中をトントンしてゲップをさせる。このような介助が必要な場合だけ、自動詞の burp が他動詞として使える。介助が最も必要なのは赤ん坊なので、the baby は目的語として自然である。大人でも寝たまわりの病人(patient)で、介助が必要な場面では他動詞文が可能だろう。しかし、元気に活動している医者(doctor)の場合は、抱っこしてゲップさせるという状況はあり得ないから、非文になる。

[2] いずれの例文も SV+OC ないし SV+OO という構文で英訳することができる。

- a. Pochi barked my father awake. (結果構文) [ちなみに、ポチにあたる英語は Fido]
- b. The lecturer talked himself hoarse. (結果構文)
- c. The pianist played me a beautiful melody. (二重目的語構文)
- d. The waiter loaded the table with all kinds of food. (壁塗り構文)
- e. The policemen pushed their way into the building. (one's way 構文)
- f. Mother burned a hole in the carpet. (穴あけ構文)

[3] 複他動詞「教える osie-」と単純他動詞「教わる osow-ar-」、複他動詞「預ける azuke-」と単純他動詞「預かる azuk-ar-」を見比べると、単純他動詞のほうに -ar という接尾辞が付いている。接尾辞の付き方からすると、「教える」、「預ける」などの複他動詞が基本で、そこから「教わる」、「預かる」などの単純他動詞が派生されると推測できる。意味的にも、教える人がいるからこそ、教わるという行為が成立し、預ける人がいるからこそ、預かるという行為が成立する。このことから、単純他動詞(「教わる、預かる」)から複他動詞(「教える、預ける」)が派生されるという使役化は除外され、複他動詞(「教える、預ける」)から単純他動詞(「教わる、預かる」)が派生されるという考え方のほうが適切だということになる。ところで、単純他動詞から複他動詞を派生するには、反使役化と脱使役化の2つの可能性がある。「教わる」や「預かる」に「ひとりでに」という副詞を付けて、「*後輩が先輩からひとりでに合格の秘訣を教わった」、「*受付係が客からひとりでに貴重品を預かった」とは言えないから、反使役化ではないようだ。「苦勞の末」などの副詞を付

けると、「後輩は先輩から苦勞の末、合格の秘訣を教わった」のように言えるが、この場合、苦勞したのは「先輩」ではなく、主語の「後輩」なので、本文(4.5.4節)の説明がそのまま当てはまるわけではない。しかし、「犯人が警察に捕まる」という自動詞文で動作主「警察」が現れるのと同じように、「後輩が先輩に教わる」、「受付係が客から預かる」でも元の複他動詞の動作主(先輩, 客)を明示することができる。元の動作主が削除されずに残っているから、「教える」、「預ける」から「教わる」、「預かる」を派生するのは脱使役化であるという結論になる。

第5章：動詞から右方向への<線>の展開

[1] UFOを「ユー・エフ・オウ」というように、英語でアルファベットを一文字ずつ分けて発音するのは個つまり<点>を重視しているからと思われ、他方、日本語で「ユーフォ」と続けて読むのは全体がひとつの<線>としてつながるという意識の反映と見ることができる。

[2] いずれの例にも非連結型の語形成が係わっている。

- a. 「出禁」は芸能関係などの業界用語で、「出入り禁止」の短縮。1モーラ+2モーラという構造に注意。
- b. 「トーシロ」は芸能関係などの業界用語で、「しろうと(素人)」の倒置語。「しろうと」の後半部「うと」を倒置して「とう」にし、その後に前半部「しろ」を加えて「とうしろ」となったもの。発音上は「トーシロ」あるいは「トーシロー」となる。「プロ」は英語のpro(fessional)と同様、「プロフェッショナル」の前部を抜き出したもの。
- c. 「きよどる」(不審な態度をとる)は「挙動不審」を「きよど」に短縮し、それに接尾辞-rを付けて、動詞kyodo-rとしたもの。「ググって」は、Google(グーグル)という名詞を「ググ」に短縮し、接尾辞-rを付けて「グぐる gugu-r」に動詞化した後、テ形語尾を付けたもの。
- d. 「テカる」はオノマトペの「テカテカ」を「テカ」に短縮したあと、接尾辞-rを付けて動詞teka-rとしたもの。
- e. 「内需」は「国内需要」の短縮。「陰り」は名詞「かげ kage」に-r接尾辞を付けて動詞(陰る kage-r)を作り、さらにその連用形「陰り」を名詞に転用したもの。
kage → kage-r → kage-r-iとなる。

[3] 日本語の述語連鎖では、後ろにくる述語が直前の述語の活用形を指定する。

- a. 「*行き-な-か-つ-た」では、否定述語「な」が先行動詞に未然形を指定するので、「行き」という連用形は間違いになる。正しくは「行かなかつた」とする。
- b. 丁寧の助動詞「ます」は連用形動詞に後続するため、「*話す-まし-た」ではなく「話しました」となる。
- c. 受身述語「られ」が形容詞「寂しく」に連結しているため間違いになる。「られ」は動詞の裸語幹に付くため、動詞「がる-gar」を補う必要があり、その後に「られ(r)are」を付けて、「寂しがられた sabisi-gar-are-ta」となる。
- d. 末尾の「です」が普通のコンピュータではなく丁寧の助動詞なので、正しくは、「です」の前にくる「ない」を過去形にして「降らなかったです」とする。あるいは、丁寧「ます」を否定形にして「降りません」とし、その後に「でした」で過去時制を補う。「でした」という過去形が現れるのは、前が否定形「～ません」のときだけで、動詞の肯定形「降ります」、「降りました」のあとには「です」、「でした」は付かない。

第6章：事象の展開を<線>につなげる補助動詞群

[1] 「立ちすくんでしまった」と「しまう」が付く理由は、その後続く文「あまりに期待がみごとに的中したからである」で述べられている。あまりにもビタリと自分の予測が的中したことに対する嬉しい意外性である。他方、英語の翻訳では、I stopped short in the doorway. (入口で立ちすくんだ)という客観的な記述になっていて、主語の心理描写は含まれていない。また、次の「あまりに期待がみごとに的中したからである」という、立ちすくんだことの原因付けも、英語訳ではIt was almost too lucky.と簡略に書かれている。ただし、It was almost too luckyの後にコロン(:)を付けて、the dancers were resting inside.と続けている。コロンというのは、理由説明を後に続けるときの記号で、「と言うのは」や「なぜなら」といったニュアンスを表す。したがって、当該の英文は「それは余りに幸運だった。なぜなら踊り子たちが中で休んでいたからだ」という解釈になる。このように、日本語では期待が的中したことに対する感情が「～てしまう」から直接的に読み取れるが、英語では感情表現は一切ない。代わりに、英語訳では、コロンの記号を使うことで前後のつながりを補足する工夫をしている。

[2] 「議論が煮詰まる」という自動詞は、形の上では「議論を煮詰める」という他動詞から脱使役化で派生されている。他動詞の意味は「議論を煮る(いろいろ検討する)という行為を詰める(最後まで行う)」ということで、語彙的アスペクトの解釈になる。元になる他動詞「詰める」は「話しを詰める」のように、最後まで追求するという意味だから、「煮詰める」の自動詞形「煮詰まる」も、「議論を尽くして、最後に結論が出る」という意味になるのが本来の解釈である。ところが、若い年代層の新しい解釈では元の語彙的アスペクトの他動詞「煮詰める」との対応が考慮されず、「議論をして、詰まった(行き詰まった/頓挫した)」という「V1してV2」型の主題関係として解釈されている。語彙的アスペクト動詞の解釈が主題関係の解釈に置き換えられてしまったため、見かけ上、本来とは正反対の意味になってしまう。

[3] いずれの例でも、V2がV1の意味を副詞的に修飾するように言い換えてみるとよい。

- a. 「呆れ返る」は「(ひっくり返るぐらい)すっかり呆れる」といった意味で、「返る」は呆れる度合いのひどさを伝える。なお、同じ用法には「静まり返る」、「煮えくり返る」、「沸き返る」などがある。
- b. 「騒ぎ立てる」の「立てる」は「ことさら大きく」といった意味で、「騒ぐ」を強調している。この用法には「あおり立てる」、「暴き立てる」、「飾り立てる」などがある。
- c. 「叱り飛ばす」の「飛ばす」は、「(相手がぶっ飛ぶほど)勢いよく、きつく」という意味。同じ「勢いよく」という意味は「張り飛ばす」、「殴り飛ばす」などにも見られる。
- d. 古語の「こくる」は強くこするという意味で、複合動詞のV2になると、V1の動作の激しさや程度の甚だしさを表す。したがって、「黙りこくる」は「いつまでもじっと黙っている」という意味になる。有島武郎の作品(1922)に「しゃべりこくる」(さかんにしゃべる)というのが出てくるが、一般的ではない。
- e. 「威張り散らす」の「散らす」は「相手かまわず、あちこちに」というような動作の荒々しさと方向性を表し、全体として「相手かまわず、むやみに威張る」という意味になる。行為の激しさを表す「ちらす」は現在では「威張り散らす」ひとつぐらいだが、『日本国語大辞典』には江戸時代以前の用例として「遊び散らす」(さんざん遊ぶ/遊興する)、「言い散らす」(分別なく、勝手なことを言う)、「いじめ散らす」(ひどくいじめる)などがあがっている。

第7章：動詞から左方向への<線>の展開

- [1] 意味を参考にしながら、形態素の切れ目を考えると、次のように分析できる。
- 「羽ばたく」は「羽(は)」と「はたく」(手足を伸ばしたり広げたりする)の複合語で、「はたく」→「ばたく」という連濁が起こっている。
 - 「滴る」は「下」と「垂る」(たれる)の複合語で、「下に垂れる」という意味。
 - 「背く」は「そ(背)」と「向く」の複合語で、「背を向ける」という意味。
 - 「自惚れる／己惚れる」の漢字から推測されるように、「うぬぼれる」は「うぬ」(自分のこと)と「惚れる」の複合語。
 - 「繙く(ひもとく)」は「紐」と「解く」の複合語で、本来は「(読むために)巻物(書物)の紐を解く」という意味。そこから転じて、今では「調べるために本を読む」あるいは「本を読んで調べる」という意味で使われる。
 - 「瞬く」は「ま(目)」と「たたく(叩く)」の複合語で、瞼(まぶた=「目の蓋」)を短い時間で閉じて開くという意味。
- [2] 名詞部分が本当の生き物(動作主)を表すかどうかをヒントに考える。
- 「猫またぎ」は「猫がまたぐ」という実際の動作ではなく、「魚好きの猫でもまたいで行く(見向きもしない)ようなまづい魚」のこと。
 - 「ドッグラン」という和製英語は、飼い犬が自由に走って遊べるような施設(場所)を指す。英語では dog park と言う。
 - 「大人買い」は(子供のように)値段を気にすることなく、商品を大量に買うこと。「大人」は子供の典型的な買い方(あまり値のほらないものを少量買うこと)と対比した言い方。
 - 「鬼押し出し」は火山噴火で溶岩が噴き出されることを、あたかも鬼が溶岩を押し出しているように捉えた比喩的な描写ではないかと思われる。
- いずれの例でも、特定の猫／犬／大人／鬼が実際に動作をするわけではない。全体として「魚」や「場所」などの具体物を指すか、あるいは動作や出来事の様子を比喩的に表しているだけなので、動作主排除の制約には抵触しない。
- [3] 軽動詞構文と見なせるのは b, d, e, h の4つ。下線部の名詞が強調構文で移動できるかどうか、代用表現で置き換えられるかどうかで確かめることができる。
- [移動] ○この大学の経済学部にいるのはマスコミで有名な教授だ。[代用] ○この大学の経済学部にはその人がいる。
 - [移動] ×私にあるのは90のおじいさんです。[代用] ×私にはその人があります。
 - [移動] ○彼女が友達と始めたのは旅行の相談だ。[代用] ○彼女は友達とそれを始めた。
 - [移動] ×私がどこか地方にしたいのは移住です。[代用] ×私はどこか地方にそれをしたい。
 - [移動] ×交通事故であったのは何人かの負傷者だ。[代用] ×交通事故でその人があった。
 - [移動] ○裁判の傍聴席にあったのは遺族の姿だ。[代用] ○裁判所の傍聴席には彼らの姿があった。
 - [移動] ○私の親戚にいるのはあの有名な落語家だ。[代用] ○私の親戚にその人がいる。
 - [移動] ×箱根駅伝であったのは数名の落伍者だ。[代用] ×箱根駅伝ではその人があった。

第8章：日本語の＜線的＞性質と言語の3機能

[1] まず、ヒント1に沿って答えると、(i)では「待望の駅ビル建設」や「期待の治療薬」のように動作主に当たる名詞を省略できる。動作主（主語）がなくてもよいから、(i)は複合語ではなく、単なる連体詞と見なせる。(ii)のほうは、動作主を省略すると「*直撃のタクシー業界」、「*発表の台風情報」のように非文法的になるから、複合語と見なすことができる。

次に、ヒント2に沿って答えると、(i)では「長年にわたって市民待望の駅ビル建設」や「旅行中はビジネスマン必携の辞書」のように言えそうである。(ii)でも、「2020年にコロナショック直撃のタクシー業界」、「けさ10時に気象庁発表の台風情報」のように時間表現を付けることができる。特定の時間を指すことができるから、(i)と(ii)は属性叙述ではなく、事象叙述だということになる。

[2] 本文で説明した種々のテストを参考にして答えると、次のようになる。

- a. 「今のところ」が時間を限定しているから、事象叙述。
- b. 「周囲から好かれる人」は一般的な性質を表す総称名詞句なので、属性叙述。
- c. 「いつも」で時間を限定しているから、事象叙述。
- d. 現時点で話者本人が感じている心理状態を表出するから、身体感覚叙述。
- e. 「思い出すたびに」で時間を特定しているから、事象叙述。
- f. 「舞台上立つと」で時間・場所を限定し、聞き手に内容確認を求める終助詞「ネ」が付いているから、事象叙述。
- g. 現時点での話者本人の身体感覚を表現するから、身体感覚叙述。
- h. 「問題」は普通なら単純な名詞だが、「な」が付くことで「問題が多い／解決が難しい」（英語で言うと problematic）という属性叙述の意味に変化している。

[3] 本書では、形態的な類型論で膠着型言語に分類される日本語が持つ＜線的＞な性質を多角的に明らかにした。この性質は、インパーフェクティブな事象認識を土台として、動詞＋補助動詞＋助動詞の述語連鎖、多様な複合動詞・複合形容詞・複合述語の語形成過程、軽動詞構文や各種構文の文法構造、さらには語用論や言語文化の日常的な現象にまで及んでいる。

- a. 形態的な＜線＞は各種の語形成（形態論）の操作（5.1～5.2節）によって作られる。具体的には、動詞＋補助動詞＋助動詞の述語連鎖（5.3～5.4節、6.7～6.8節）、テ形接続の補助動詞（6.3節）、動詞＋動詞型の複合動詞（6.4～6.6節）、名詞＋動詞型の複合動詞（7.1～7.2節、7.4節）、名詞＋形容詞型の複合形容詞（7.1～7.2節、7.4節）などの形で現れる。
- b. 意味的な＜線＞は、ひとつにはインパーフェクティブな事象把握（変化過程・進行過程の重視）という認知的な原理（3.1節）に由来し、具体的には状態動詞と進行形（3.2節）、「燃やしたけれど燃えなかった」構文（3.3節）、中間経路の重視（3.4節）、「東京まで寝ていた」構文（3.5節）、さらには結果構文や二重目的語構文、受身文、自他交替などの文法現象（第4章）に反映される。意味的な＜線＞の形成を裏付けるもうひとつの現象は、選択制限（1.3節、2.4.2節）、項の受け継ぎ（2.4.2節、7.3.3節、8.3.2節）、軽動詞構文における名詞の不定性（7.3節、8.2節）、属性叙述（8.3節）と身体感覚叙述（8.4節）などである。形態論と統語論のインターフェイスに位置づけられるこれらの現象は、語彙（形態）の構造と文（統語）の構造を包括した文法システム（7.4節）を持つ日本語の際だった特徴と見なせる。
- c. 語用論における＜線＞とは年功序列や話者・聴者・第三者の関係など、対人関係に基づいて形成される社会的なつながりを指し、指示詞、直示の移動動詞、ポライトネス、依頼と謝罪などの現象（いずれも第2章）に反映される。